

私立大学フォーラム2016

「学問するよろこび」総括（大阪会場）

鹿島 久幸 ● 広報・情報部門会議（フォーラム）委員、松山大学学生部次長兼保健室事務長

2016年度第3回私立大学フォーラムは、2016年11月5日、大阪・関西大学梅田キャンパスを会場に60名の参加者を得て開催された。今回のテーマは「学問するよろこび」。学問の原点である「学ぶよろこび・楽しさ」とはどのようなものであるか。そして、大学は学問するよろこび、自立した人材をどう育んでいけるか。知識の体系化を通して人間形成を行う大学本来のあり方が改めて問われている。当日は、芝井敬司氏（関西大学学長）の挨拶に続き、日本の伝統文化を継承する茶道武者小路千家第14代家元（宗守）と、グローバルな先端科学に取り組みむ東京大学大学院情報学環教授という対照的な分野で活躍する2名の講師が意見発表を行った後、パネルディスカッションを通じて、複眼的視点から議論を深めた。

●意見発表1

「茶の湯は我が国学校教育の礎」

千宗守氏（茶道武者小路千家第14代家元）

千利休以来の茶の湯（茶道）の道統と血筋を継承する千宗守氏は、冒頭で、学ぶことの意味について、「まなぶ」は「まねぶ」ことであり、先人の軌跡をなぞらえて学ぶという土台づくりの大切さを強調した。その後、日本の伝統文化が学校教育の普及に果たした役割などについて、以下の通り見解を述べた。

① 国民が広く新しい学問を学ぶことができるようになった明治維新以降の教育制度の下地には江戸時代の寺子屋や藩校の存在があるが、茶の湯、和歌、生け花、能楽といった日本の伝統文化が果たしてきた役割も見逃せない。茶の湯は、日常の煩雑な生活にある人々がつかの間の「別世界」に身を置き、ストレスなどから解

放され、また元の日常に戻って、活動を続けるために、四百数十年前に千利休等によって考え出されたもの。

伝統文化には、いずれも「流儀」があり、英訳すると「School」になる。あらゆる日本美の集合体である茶の湯に多くの人が集まり、茶の湯の稽古を続けていくうちに、知識をできるだけ短時間かつ効率的に、誰にでも分かりやすく教える方法として流儀が形作られ、その教育機関として家元制度が生まれた。こうした伝統文化の流儀の存在が、学校教育が全国あらゆる階層に短期間のうちに普及する際の礎となった。

② 茶の湯の流儀は禅宗の作法を参考にしている。禅宗では座禅中の睡魔を避け、覚醒した頭で修行に打ち込むため、わずかな休憩時に濃いお茶を飲んだ。これが「茶礼さらい」であり、後年、茶礼から茶の湯が分立した。

③ 禅宗では修行僧が老師の元で学問を学んだが、答えを直接教えるのではなく、迷いに迷わせた後に気づきを与える老師が最高の先生とされた。いわば、極端な英才教育だ。茶の湯の世界でも、プロを目指す人には自ら黙々と愚鈍に学ぶ厳しい修業を課している。

④ 全ての学生が一定レベルの成果を得られるような近代の大学の教育方法は、行き詰まりを見せていないか。

学生の目的によって学びの質を変えるような、もう少しファジーな要素があってもよいのではないか。これからの時代を背負う優秀かつリーダーシップを持った人材の育成には、伝統文化や禅宗に脈々と受け継がれてきた修練のような教育方法も役に立つはずだ。

●意見発表2

「科学技術の視点から見直す大学の役割」

大島 まり氏（東京大学大学院情報学環教授）

最先端のバイオ・マイクロ流体工学分野で研究と教育に注力する大島まり氏は、最初に自身が取り組む研究の概要と意義について紹介。その後、21世紀の科学技術が社会にもたらす影響をひもときながら、科学技術の視点から大学の役割と、これから求められるイノベーション人材について、以下の通り見解を述べた。

① 研究者にとっては研究成果を挙げることが目標であるが、さらに、得られた高度な情報を提供することによって安全で安心な医療への貢献や、産学協同によって次世代のイノベーションにつながる人材育成に注力することも大きな使命である。

② 学問とは一定の理論のもとに体系化された知識であ

り、大学とは学術の研究および教育の最高機関である。大学や大学院などの高等教育機関で学ぶ学生とは、能動的に未知の予測を実証し、自ら研究する人。大学教育は教養教育、専門教育、および卒業研究の三つの柱をより密接に連携させ、「知の継承」と「知の創造」を行っていかねばならない。

- ③ われわれは最先端の科学技術に囲まれて生活しており、便利さや快適さは科学技術に牽引される形でもたらされてきたが、もはやそれだけで答えを見つけることは難しい。東日本大震災以降は、社会のさまざまなニーズと密接かつ複合的に関わりながら、科学技術と社会が両輪となって共に進化していくことが求められている。理工学の観点から人間の体を分析・研究するバイオ・マイクロ流体工学のように、複数の学問分野を横断して研究を行う学際領域が増えている。既存分野にとらわれない、複眼的な視点とアプローチがより重要になる。

- ④ ITやAI（人工知能）の進歩によって、社会のグローバル化や多様化、そして研究分野では短期間の課題解決という方向にシフトしていくはずだ。これからの社会には、知識の質・深みを極めたり、知識を複眼

的に使いこなしたりするグローバル人材が必要となる。そのカギを握るのが、「Way of Thinking（思考の方法）」「Tools for Working（仕事のための道具）」「Ways for Working（仕事の仕方）」「Ways of Living in the World（世界の中の生き方）」という四つの「21世紀型スキル」である。大学には、新しい社会をデザインし、イノベーションを牽引できるグローバル人材の育成が期待されている。

● ディスカッション

後半は、コーディネーターの本田知宏氏（福岡大学工学部教授）、渡部直樹氏（慶應義塾常任理事）を交えて、ディスカッションが繰り広げられた。主な論点と発言の要旨を以下に紹介する。

- ① 学生に「学ぶよろこび」をどう実感させるか。また、「学びへのやる気」を喚起するには何が必要か——日本の大学は、学生の大半が日本人で、年齢も近い環境にある。異質な人々が切磋琢磨する環境が必要である。自分とは違うやり方、考え方があることを身近に実感することは大きな刺激や励みとなる（大島氏）。日本人は純粹培養的教育を受けている。特に文系の学生は、

学ぶことへの真剣さが足りない。茶の湯の修業では、自分を追い込んだ人ほど成果を挙げている（千氏）。

- ② 大学全体で問題解決していくことは可能か——マサチューセッツ工科大学（MIT）では、学生は大学で学ぶことに自ら投資し、大学側もその期待に応えようとして、共に良い方向に循環する。一方、日本の大学は教育が単一になりがちで、卒業研究も終わらないうちに就職活動が終わってしまうような不幸な状況がある。留学生を積極的に受け入れたり、学生を海外に派遣したり、企業と連携して教育プログラムを構築するなど、核となる新たなプログラムを積極的に取り入れていくべきだ（大島氏）。

- ③ 茶の湯の流儀が「School」である理由——茶室ではお茶を飲むだけでなく、掛け軸や絵を愛でたり、陶器や唐物の名品に触れたりすることによって豊かな気持ちになり、大事な商談や交渉も行った。さらに、古来、上流階級最高の教養とされた和歌も茶の湯を通して身に付けることができた。茶の湯は、武将たちを文化人に育てる「School」であった（千氏）。

- ④ 茶の湯でいわれる「不完全の美学」の意味は——岡倉天心の著書『茶の本（The Book of Tea）』に登場す

る言葉だが、もともと日本人には、足りない部分を心で補って楽しむ美意識があった。例えば、前衛的な茶碗も完全なものではないから面白い。茶の湯においても、意図的にファジー（＝不完全）なところをつくって楽しむ奥の深さがある（千氏）。科学技術の研究においてもファジーな要素はある。進行中の研究の全てが完全であるという保証はどこにもない。ところが、「答えは一つでなければいけない」と思い込んでいる学生は多い。また、学生は試験で高い点数を取れば認められたという実感を抱くことができるが、答えのないものに対する取り組みについても誰かに認められたいという保証を欲しているところがある。そうした目に見えない欲求を察して評価する環境もつくるべきである（大島氏）。

最後に渡部氏は、「何かを成し遂げた時、人は誰でもこの上ないよろこびを感じる。その手伝いをするのが大学教育に携わる人間の使命ではないか。日本の伝統文化とグローバルな先端科学との複眼的視点について掘り下げたい素材はまだ多いが、本日の議論が大学本来のあり方を見つめ直すヒントにつながれば幸いである」と、フォーラムを締めくくった。

私立大学フォーラム2016

「大学入試と私立大学の改革」総括（福岡会場）

出口 清孝 ● 広報・情報部門会議（フォーラム）委員、法政大学デザイン工学部教授

2016年度第4回私立大学フォーラムは、2016年12月10日、福岡大学を会場に、165名の参加者を得て開催された。今回のテーマは、「大学入試と私立大学の改革」。福岡大学学長・山口政俊氏の挨拶に続き、3名の講師が個別大学の取り組み事例を紹介しながら、大学入試改革の現状と問題点について意見を発表した。その後、パネルディスカッションを通じて、さまざまな角度から議論を深めた。

●意見発表1

「教育方針に合致した入学者選抜制度の実現」

伊東 辰彦氏（国際基督教大学教養学部長）

伊東辰彦氏は、明確な教育方針の重要性を強調するとともに、教育方針に合致した入学者選抜制度の実現に向けて、以下のような見解を述べた。

① 「ゆとり世代」が問題になっているが、各種の改革において現場の教員や準備制度が十分でないうちに実行すれば、結局振り回されるのは現場であり教育を受ける生徒・学生である。どのような教育を目指すのかという方針がはっきりしなければ、それにふさわしい入学者選抜はできないことを理解すべきである。

② 国際基督教大学（以下、ICU）の使命を支えているのは、リベラルアーツ教育、Critical Thinking、および少数教育であり、さまざまな入試が行われている。あまり複雑な制度にならない工夫も必要である。例えば一般入学試験では、「総合教養」という新しいスタイルの入試を行っている。これは、あるトピックについて15分程度の短い講義を聴き、それに関する教科横断的な設問に答えていくというもので、名付けてA T L A S (Aptitude Test for Liberal Arts) とする。

リベラルアーツ教育を提唱するICUの、受験生に向けたメッセージとなっている。さらに、より多様な言語背景・教育背景を持つ学生の増加を見据え、単一ではなくより複雑な体験を生かせる資質を持った学生を広く求めるための「ユニヴァーサル入試」も実施している。

③ 入学後は専門化を急がず、1〜2年次には30余のメジャー（専修分野）の基礎科目を各自選択して履修。興味のある分野を絞り込み、3〜4年次には自身の専修分野について学びを深め、最終学年には集大成として卒業研究を行う。学びをより実りあるものにするためには、自覚的に学修方針を決める「アカデミックプランニング」が不可欠である。

④ そもそも大学入試は教育の一環であり、学びは連続的に扱われるべきだ。そのために必要とされるのが高大連携や高大接続である。結果としての可否とは無関係に、受験生個々が試験の場において個人として尊重され、公平に扱われたという記憶も入試には重要ではないか。そのポリシーは、本来、大学ごとに明確にあるべきものである。

●意見発表2

「私立大学でなぜ高大接続改革が必要なのか

——早稲田大学を参考にしつつ——」

沖 清豪氏（早稲田大学入試開発オフィス長、

文学学術院教授）

沖清豪氏は、高大接続改革が必要とされる理由について、以下のような見解を述べた。

① 学生像の多様化は、自律・学術志向・指導性に富んだ「エリート型」、半能動的な「マス型」、受動的な「ユニバーサル型」の3層化で捉えられる。エリート型学生は世代の約15%の割合で推移し、20世紀後半以降はマス型学生が世代の15〜50%、21世紀はユニバーサル型が50%以上と、大学の大衆化とともにマス型とユニバーサル型が急増している。また、中等教育課程の多様化により、学生の学力や社会観も多様化。こうした状況に危機感を抱く高大接続システム改革会議は、21世紀型資質・能力の育成を求めている。

② 21世紀型資質・能力の獲得のために必要となるのが、「学士力」だ。知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力の4領域で構成されるが、基盤は高校で培われ、発展を大学が担うと

いう役割分担が理想である。

- ③ 「早稲田 Vision 150」を掲げて教育改善に取り組んでおり、その核心戦略こそが入試制度の抜本的改革だ。各学部・大学院が求める資質の学生を国内外から発掘し、積極的に獲得する方式を検討。世界各地から多様な学生が入学し、勉学に励む場の実現を目指す。入試改革では、背景にある学生像の変化、社会の変化、地方の優秀な学生の選抜などの制度改革を行っているが、選抜制度の改革だけで済む問題ではない。入学後、自覚的・自発的・探求的に変化に対応できる学生を育て、卒業させることが重要である。

- ④ 高大接続・連携の視点で大学の入試改革を考えると、入試制度は大学から中等教育機関に向けたメッセージであり、中等教育側の変革を促す直接的・間接的手段ともなる。学習指導要領との密接な関連、中等教育との適切な連携・接続を図り、学生ファーストで考えていくことが改革の原点であるといえる。

●意見発表3

「高大接続（教育接続）に向けた一つの試み」

黒瀬 秀樹氏（福岡大学副学長）

福岡大学における高大連携事業について、黒瀬秀樹氏は以下のような見解を述べた。

- ① 「福岡大学ビジョン2014―2023」を掲げ、大きな視野と中長期的な視点から新たな成長戦略を実践している。なかでも、アジアの玄関口としての福岡の特性を重視し、アジア諸国との関係を中心にグローバル人材教育を展開。各国から優秀な留学生を積極的に受け入れており、日本人学生への刺激となる。

- ② 入試については、九州および山口県の志願者・合格者が圧倒的に多く、福岡県の就職者数も卒業生の約4割と、地域に立脚した大学として存在感を示している。課題としては、学力が高く活力ある学生の確保、「学力の3要素」の的確評価による高大接続改革への対応、入学定員超過率厳格化への対応が挙げられる。

- ③ 少数科目による入学試験や、多様な入学制度の導入に伴う合格決定の早期化などによって、大学自身が本来の高校教育を歪める事態を引き起こしてきた。その反省から、福岡大学では、大学教育の質保証を第一の目的とし、早くから高校との間で「高大接続」の取り組みを推進・強化している。2007年からは、附属若葉高等学校において理想的な「高大一貫教育」を目

指す試みを開始している。多様な福岡大学出張講義のほか、1年次から興味のあるテーマを自ら選び、本格的なレポートを作成する課題研究に取り組み、発表会では大学教授が直接指導し、キャリアデザイナーをサポートする。3年間の修学履歴は「若葉フォリオ」に記録されるため、高校在学中のパフォーマンスを総合的に審査でき、高大接続教育に資する。

● ディスカッション

後半は、コーディネーターの松本亮三氏（東海大学観光学部教授）が大学改革を巡る昨今の主要な動きを整理した上で、ディスカッションが繰り広げられた。主な論点と発言者の要旨を以下に紹介する。

① 新テスト導入についてどう考えるか——大学入試センターで1万人規模の記述式採点が可能であれば、利用を拒む理由はない。ただ、国語は大丈夫だとしても、数学の採点は難しいだろう。私立大学の多様性に鑑み、アラカルト方式を一部維持してほしい（沖氏）。

② 記述式・論述式で思考力・判断力・表現力を大学が判断することに無理はないか——学力だけでなく、思考力がないと解けないような問題を、これまでも

一般入試の中で出題してきた。出願書類の段階でも受験生の思考力などのレベルはある程度判断できる。方法はある程度大学に任せてほしい（沖氏）。

③ 主体性・協働性を大学入試で評価対象としていいのか——新入生の多様性を確保しようと思えば、主体性や協働性に優れた人材を入学させる方法も私立大学としての選択肢ではないか（黒瀬氏）。

④ アクティブラーニングの取り組みにどう対応していくか——福岡大学では、アクティブラーニング導入を推奨する制度を検討している。ただし、導入や準備には教職員に大きな負担がかかるので、そのサポートも必要だろう（黒瀬氏）。決まった教科書はない。人間同士の対話の中で、柔軟な感性が醸し出されていくことが重要ではないか（伊東氏）。

最後に、松本氏は「大学改革というテーマは非常に身近な問題だが、実に難しい問題でもある。ゆえに、日々、現状、実情に目を行き渡らせながら考え続けなければいけない。日本私立大学連盟としても、できるだけ風通しの良い形で大学改革が進められるよう、各方面から英知を結集しながら常に意見を発信していきたい」との決意を示し、フォーラムを締めくくった。